

スポーツ文化フォーラム Session 4

人とホスピタリティ研究所代表
ザ・リッツ・カールトンホテル 元日本支社長

高野 登 氏

スポーツとは、
鍛え上げた肉体で人生哲学を
具現化する営みである。

by 高野 登



スポーツは文化である

スポーツドクターとして、
「スポーツは文化である」と
世の中に伝えたいと思っています。

文化にはスポーツもあり芸術もあり、音楽もある。
人間の心の豊かさを作る活動すべてが文化なのです。
スポーツの文化的価値は、
医療性、芸術性、コミュニケーション性、教育性、
この4つであることに行き着きます。
人はこの4つがないと、人間らしく生きていけません。

スポーツの医療性によって**元気**を、
芸術性によって**感動**を、
コミュニケーション性によって**仲間**を、
教育性によって**成長**を。

「スポーツは文化」と言える国にすることが、
私の志でありミッションの1つでもあります。

文化観 人からにじみ出る “重力”

辻 今日はスポーツ文化フォーラムということで、心から尊敬する高野さんと人の心の豊かさをもたらす営みである文化やスポーツについて語り合っていきたいと思います。高野さんは“文化”というどのようなイメージでしようか？

高野 文化は、まずそれを感じる人と感じない人がいると思っています。その人の生き方に通ずることだと思うのですが、モノゴトに向き合う姿勢に哲学をもつてやっている人からは“重力”を感じますし、そうでない人からは“重力”を感じられないんです。

辻 重力ですか。それはどのように感じられるのでしょうか？

高野 にじみ出るものでしようか。人柄

は隠せないですね。目からも出てきますよね。その人の在り方とか。顔かたちは生まれつきのものですけど、顔つきは自分の責任ですよね。だから顔つきを通してふつと感じるものがあると思います。

品格を支える一體感

辻 それは“品格”という言葉でも表現されるものですか？

高野 そうですね。例えば、人と同様に組織の品格を考えたとき、品格を感じない組織があるとすればそれはなんだろうとか、品格を感じない地域社会があるとしたらそれはどうしてだろうというようなことを考えます。リーダーであっても、あの人からは品格を感じる、この人からは品格が伝わってこないというようなことがありますよね。その違いはどこから生まれてくるのか、他の人から見て自社は品格のある会社だと思われているのか、

思われているとしたら何をもつてそれを感じて下さっているんだろう、もし思われていないとしたら何が足りないのかとということを考え続けたとき、一つの共通する切り口があつたんですね。それは、一体感を感じさせる何かが組織の中にありますということでした。スポーツでも同じではないかと思います。例えばサッカーチームとサッカーゲループがあるとして、この違いはどこから来るかなど、チームには一體感があるんですよ。一つの目的が明確になつていて、さらに目的を共有し、それを実現するためにリーダーがいる。そのために戦略がある。そういうことが重なり合つて一體感を感じるんですね。

辻 いいですね。私の考えるエクセレンツなチームの三大条件は自立と信頼と共有です。一體感に繋がることですが、個人の自立性がしつかりしていて、お互いの

信頼がそこに存在している。その上で全体に目標や目的の共有が出来ているという状態です。

高野 リツツカールトン時代の出会いで私の人生に大きな影響を与えた人がいます。彼らとリーダーとして大事なことは何かという話になると“愛”と“勇気”と“パッション”という三つに落ち着くんです。そして、この三つの中で仮に優先順位があるとすれば“勇気”が一番大事だと考えられています。

組織の中で自分のポジションが上がりリーダーになつていくと相談する相手がいなくなりますよね。色々なことを言ってくれる人も少なくなり、耳の痛いことは聞こえなくなつてきます。つまり、リーダーになつていくということは孤独だということです。その孤独に打ち勝つというのは実はものすごく勇気のいることだという考え方です。我々はつい易きに流されたり、

イエスマンを揃えてしまつたりするわけですが、そういう中であえて厳しい状況に自分を置く、そしてイエスマンを揃えずに自分の信念を貫き通して組織をつくっていくというのは勇気のいることだと思うのです。

辻 素敵ですね、その勇気。その勇気をもつて生きることが品格の芽になつていくとして、そこから育まれてくる愛や情熱についてはどうなお考えですか？

高野 最終的には人としてどう在りたいかということだと思います。例えば仕事をしているのであれば、せつかく与えられた仕事人生という幸運な機会を自分が人としてどう在りたいのかということを考えるチャンスと捉えなければもつたない。パッションというのは最終的に何を目指しているかなど、広義に解釈するところの“優しさ”に行きつくるで

はないかと思うのです。甘さではなく優しさです。

辻 それは思いやりではないんですか？

高野 少し違います。優しさの中に思いやりがあるという感覚です。優しさという能力は漢字で書くと“人を憂う”と書きますよね。人に対して自分の想いを持つていく力があるかどうか、人を憂うことが出来るかどうかということです。そして人を憂うことに秀っている人が“優秀な人”ということになりますよね。私のお師匠さんが人を憂うというのが優しさの根本だということをよくおっしゃいます。それは人に甘くするということではなく、厳しくすることもある。相手の成長を思つてその人の可能性を引き出すために時として厳しいことを言うのもその人を憂うことだという解釈です。スポーツの世界ではそういうことが頻繁に起こり

ますよね。

目に見えないものへの意識

そうですね。私も本質的に大事なことは、先ほどお話を挙がった勇気、愛、パッションや品格など、定量化しにくい概念的で目に見えないモノだと思うんです。一方で、今の社会は目に見えるもの、定量化出来るものを重んじすぎるくらいがあります。このような今の日本の流れとこれから先のあり方についてはどのようと考えられていますか？

いですけど生きている間しか使えないすごく大事な財産であり、すごく大事なものを生み出すエネルギー源です。だけど現実ではお金を無駄遣いしている人が少ない割にこのような意識の無駄遣いをしている人が多いと感じることが多いですね。こうした意識こそ無駄遣いをしている暇はないと思うのです。

日本人の素晴らしさ

本当に大事なことは目に見えないものですよね。例えば目に見えない報酬というのがあります。仕事を通して得られる喜びとか給与明細書には載つてこない成長感とか仲間と仕事ができる喜びや繋がりとか。私は目に見えない財産という言い方をよくしますが、そういう自分の中にある意識的なものは目にはみえな

こにあつたんだと思うんです。例えばアメリカではそれはマニュアル化されるメソッドではそれをマニュアル化しているホスピタリティなんです。日本のおもてなしはマニュアル化が出来ないです。もう一つ、日本人の素晴らしさを挙げるト、人の幸せを心から願つていたという証拠が様々な神社に残つていています。昭和の半ばくらいまで人が色々なものを奉納していく中に「諸国客集繁盛」という言葉があるんですけど、諸国は諸々の国、客集はお客様の集ですよ。そして繁盛。これは日本中にいらっしゃる私たちみんなのお客様が繁盛されますようにという祈りの表れです。これを何百年もやつていて、だから日本は百年企業、二百年企業、三百年企業というのが当たり前にあります。それが昭和五十年頃から彫られる言葉が変わってきたんですよ。その頃出てきたのが「商売繁盛」です。

うちが儲かりますように、うちはお客様がたくさん入りますように、うちの売り上げが上がりますようにということをみんな願うようになったわけです。つまり、昔の日本には祈りがつたのに対して、今は願いがこもつてしまっている。

辻 元々あつた我々の遺伝子に組み込まれている修身の考え方とか、人のことを思つて喜ぶことのできる純粋な日本人の心について、教育の影響は大きいと思うのですが、改めて我々に出来ることは何でしょうか？

高野 私はやはり一人ひとりの意識の問題だと思っています。一人ひとりに出来ることがあって、それは自分なりの思いを伝えることだと思うのです。教えるという上から目線ではなく、みんなが持つている感情、みんなが持つ

ている日本人としての素晴らしい品格もそうですけど、日本人を強くしてきたものを覚醒させなければいけないんです。今はそうしたものを見させているだけですから。思いを伝えていくことでそれを覚醒させなければいけないんです。

辻 道ですね。

スポートとは準備をし続ける行為

辻 そうですね。私自身はスポーツこそがそういう人間の豊かさを感じ取させてくれる素晴らしい活動の一つだと思っていますが、最後に高野さんにとってのスポーツのイメージをお伺いしたいと思います。

高野 まさに道だと思います。なぜこれが文化と認識されなかつたのかを考えると、我々が子どものころにやつていた体育が勝ち負けにこだわり過ぎて、そこに文化性を持ち込む先生がいなかつた影響もありますよね。

高野 スポートとは準備をし続ける行為である。だから生涯完成形がないものですね。例えばスポーツの世界の最終着地点がオリンピックなのかというと決してそうではない。その価値や良さを伝えて

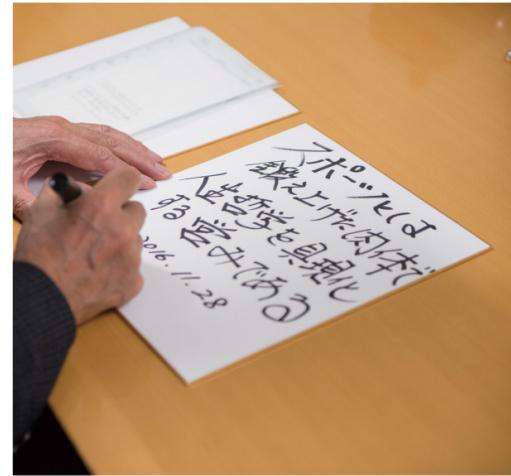
ていく、伝える側になつていく、そうするのためにまた準備をする。一生涯、正しく準備をし続ける、とても楽しい営みだと思います。

よね。人間としての器や品格を磨き続けて八段になろうとする人たちが今でも日本中にたくさんいらっしゃいます。「八段にふさわしい」と八段の方に言われたら八段になれると世界です。

日本にはまだそういう素晴らしいものがあるんですね。そういうことを肝に銘じながら人生の“道”を歩んでいきたいと思っています。高野さん、本日は本当にありがとうございました。

二〇一六年十一月二十八日

スポーツ文化フォーラム



2016年11月28日
スポーツ文化フォーラム
Session4
六本木アカデミーヒルズ
編集 株式会社エミネクロス
撮影 田口聖也
製作・発行
株式会社エミネクロス

高野 登

人とホスピタリティ研究所代表
ザ・リッツ・カールトンホテル 元日本支社長

人とホスピタリティ研究所代表。
シニアコンサルタント。
1953年長野県生まれ。
ザ・リッツカールトン・ホテル・カンパニー日本支社長を経て、2010年「人とホスピタリティ研究所」設立。
人財、組織、地域づくりのサポートを行う。
最新刊に、牛窪恵氏との共著、
「大人を磨くホテル術」(日本経済新聞出版社)。
(2016年11月現在)

スポーツ文化フォーラムとは

スポーツや文化、人生などについて
より豊かな毎日を送るヒントや気づきを
多方面でご活躍される文化人をゲストにお迎えし
スポーツドクターと対談するイベントです。

<http://www.doctor-tsugi.com/>

